

皮膚科

a. 体制

2023 年度は 5 名体制で診療を行った。詳細は以下の如くである。

主任部長：

吉川義顕（京大 1991 年卒、 2017 年 4 月から当院勤務）

副部長：

古賀玲子（岐阜大 2003 年卒、 2010 年 1 月から当院勤務）

医員：

山上優奈（大阪医大 2010 年卒、 2017 年 1 月から当院勤務）

臼居志保（香川大 2017 年卒、 2023 年 3 月から当院勤務）

レジデント：

森脇寛（広島大 2021 年卒、 2023 年 4 月から当院勤務）

b. 診療実績

外来の診療体制については前年度と同様に、月曜日から金曜日までは午前3診、午後2診で診療し、水曜日の午後には外来手術枠を設け、木曜日の午後には褥瘡回診を行っている。

診療方針としては、原則として主たる疾患群に関してはガイドラインに準拠した診療を基本とし標準化された治療を行うよう努めるとともに、患者との情報共有に重きを置いて診察している。

外来診療および入院診療における傾向としては、コロナ禍以前（2019年度）と比較し、それ以降（2020年度～2022年度）では延外来患者数、初診患者数、新入院患者数は減少していたが、2023年度は、延外来患者数、初診患者数、紹介患者数、新入院患者数のすべての実績において回復の兆しが見られている（表：2019年度～2023年度の外来診療および入院診療における主な実績）。

具体的な診療内容としては、まず近年の皮膚科診療における大きな特徴として、乾癬、アトピー性皮膚炎、蕁麻疹などの主要な皮膚疾患において生物学的製剤の使用が標準化されてきたことが挙げられる。さらに中等症以上のアトピー性皮膚炎においては、JAK 阻害薬による内服治療も行われるようになってきた。生物学的製剤や JAK 阻害内服薬は使用できる施設に制限が設けられているが、当科は使用が許可された施設でもあるうえに、すべてのスタッフが十分なトレーニングを受けているので、地域の医療機関とも積極的に連携しつつ適切に生物学的製剤や JAK 阻害内服薬の導入および維持療法を行うことが出来ている。

乾癬の診療には特に重点を置いており、外用療法、内服療法、光線療法（ナローバンドUVB、エキシマライト）、生物学的製剤を用いた治療を、症状の重症度や患者のライフスタイルなどを総合的に検討したうえで適切に選択している。2023年3月時点で64例（前年度は48例）に対し生物学的製剤を使用中である。

アトピー性皮膚炎の治療の基本は外用療法であり、当科の診療においても外用指導を丁寧に行うことを徹底しており、外用指導を含めた教育入院も行っている。その他の治療選択肢として光線治療や免疫抑制薬の内服治療も行っているが、このような既存治療では効果が不十分である場合には生物学的製剤や JAK 阻害内服薬を用いて治療している。2023年3月時点で63例（前年度は60例）に対し生物学的製剤を投与中であり、アトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤の使用症例数は年々増加傾向にある。また、JAK 阻害内服薬の使用も徐々に増えつつあり、2023年3月時点で16例（前年度は13例）に使用している。

特発性慢性蕁麻疹に関しては、日本皮膚科学会のガイドラインに則った治療選択を基本としており、難治な症例には生物学的製剤を使用しており、2023年3月時点で15例（前年度は26例）に対し生物学的製剤を使用中である。

その他の疾患として、当科は円形脱毛症に関しても積極的に診療に取り組んでおり、ステロイドパルス療法、ステロイド局所注射、局所免疫療法（SADBE を使用）、光線療法、内服療法、外用療法などを組み合わせて治療している。基本的な治療方針としては、急性期で広範囲の場合には入院のうえでステロイドパルス療法を行い、慢性期の難治性で広範囲の脱毛症には局所免疫療法を選択していることが多かったが、脱毛部位が広範囲に及び難治の場合の選択肢として JAK 阻害内服薬が加わったことで、治療の幅が広がった。

皮膚の良性および悪性腫瘍の治療に関しては、当院形成外科と協力しながら最適な治療を選択するようにしている。また、保険外診療としては、男性型脱毛症治療、陥入爪に対する金属ワイヤー法を実施し

ている。

入院患者の疾患内訳としては、細菌あるいはウイルス感染症が例年同様もっとも多く、その他には、湿疹・皮膚炎群、薬疹、水疱症、皮膚潰瘍、血管炎、円形脱毛症などが入院の対象疾患となっている。2023年度の入院患者数の内訳は、蜂窩織炎・丹毒などの細菌感染症は48例（前年度24例）、帯状疱疹を含むウイルス感染症は35例（前年度26例）、円形脱毛症は11例（前年度10例）、薬疹は4例であった。

他職種とのチーム医療については、看護師専門外来であるフットケア外来と連携を図り、皮膚潰瘍や爪囲炎の発症予防に努めている。また、毎週木曜日の午後には皮膚科医師の他に、看護師、理学/作業療法士、管理栄養士、薬剤師、事務職を交えた多職種での院内の褥瘡回診を実施し褥瘡発生率減少と褥瘡予防の啓発に向け活動している。

皮膚科は他の診療科との関わりが多く、さらに処置も多い診療科であるため、他の診療科の医師や、看護師、事務職などを含めたメディカルスタッフとのコミュニケーションを大切にし、円滑な診療のもとで最適な医療を提供することを常に心掛けている。

（表：2019～2023年度の外来診療および入院診療における主な実績）

	延外来患者数	初診患者数	紹介患者数	1日あたり の 在院患者数	新入院患者数
2019年度	18,160	3,296	517	4.1	150
2020年度	15,634	2,743	415	3.1	105
2021年度	15,301	2,678	480	2.6	90
2022年度	14,846	2,582	479	2.4	78
2023年度	15,175	2,701	523	3.5	120

c. 研究実績

【学会】

- 1 吉川義顕 外用療法の基本と実践 第122回日本皮膚科学会総会 2023年6月1日-4日（神奈川）
- 2 臼居志保、森脇寛、山上優奈、古賀玲子、大下恵樹、山本健人、吉野琢哉、吉川義顕 人工肛門周囲の壊疽性膿皮症に対しタクロリムス水和物軟膏が著効した1例 第75回日本皮膚科学会西部支部学術大会 2023年9月16日-17日（沖縄）
- 3 森脇寛、臼居志保、山上優奈、古賀玲子、吉川義顕、宮本将和 動眼神経麻痺をきたした帯状疱疹の2例 第74回日本皮膚科学会中部支部学術大会 2023年10月28日（京都）
- 4 森脇寛、臼居志保、山上優奈、古賀玲子、吉川義顕 皮膚腺病の1例 第483回日本皮膚科学会京滋地方会 2023年12月16日 京都府
- 5 森脇寛、臼居志保、山上優奈、古賀玲子、吉川義顕、中川隆太郎、塩田光隆 乳児に生じた膿疱性乾癬の1例 第501回日本皮膚科学会大阪地方会 2024年2月3日（大阪）

【論文】

(症例報告)

- 1 衣斐 菜々, 岡本 吉央, 吉川 義頭 本態性血小板血症に伴う足趾潰瘍 Visual Dermatology. 2023 22 巻 p678-679 (査読無し)
- 2 Senda A, ..., Yoshikawa Y, Recurrent cutaneous squamous cell carcinoma in the occipital scalp with clinical perineural invasion developing jugular foramen syndrome. *JAAD Case Rep.*,38: 35–37.2023 (査読有り)

【研究】

- 1 乾癬における生物学的製剤を基盤とした集学的治療の有用性評価に関する研究 (吉川義頭、古賀玲子、山上優奈)
- 2 円形脱毛症における標準的治療の最適な介入時期とアウトカムに関する研究 (吉川義頭、古賀玲子、山上優奈)
- 3 蕁麻疹の標準的治療と臨床的効果に関する研究 (吉川義頭、古賀玲子、山上優奈)
- 4 アトピー性皮膚炎における標準的治療の有効性の臨床的評価方法に関する研究 (吉川義頭、古賀玲子、山上優奈)